

十二月三日 スーチャンの通訳とし配置替

えされる。

四日 スーチャン第十一收容所第二

分所に入る。

昭和二十一年六月一日 スーチャン二十四、二十五番

炭坑にて、採炭並びに坑道掘

削作業に従事する。

昭和二十三年六月二十八日 炭坑作業終了の通告を受

ける。

三十日 スーチャンの收容所を出発

する。

七月十三日 ナホトカ港にて大郁丸に乗

船、出港。

十七日 舞鶴上陸、復員。

飛行兵（機関工手）。

〔終戦時の職名〕  
最も長くいた收容所名 スーチャン市第十一收容所第

二分所。

（広島県 山田 浩造）

## 公主嶺からタシケントへ

広島県 小松崎 利作

緑の街公主嶺、それは楽園そのものであった。昭和二十年七月頃から、平原の彼方にのろしが上がるようになり、衛兵勤務の歩哨が増強された。そして八月九日未明、「ソ満国境で日ソ交戦状態に入る」の報である。在満各航空隊より教育のため派遣されていた教育生の見習士官、少尉候補生、下士官候補者、甲、乙幹部候補生、特別幹部候補生などが続々と原隊に向けて出発していった。「戦場で会おう」の合言葉のもとに。だが、その装備は乏しく、三八騎兵銃が唯一の武器であった。

ソ連軍は大戦軍群を先頭に、はや白城子を突破している……との情報が入る頃、原隊に復帰すべく出発していった教育生が続々と教育隊（通称、公主嶺教育隊、関東軍第二航空軍第一教育隊、満州第一六六一三

部隊)に戻ってきた。ソ連軍の破竹の進撃に、もはや交戦できる状態ではなかったのである。部隊の上層部は兵を派遣して、満鉄公主嶺駅に停車していた北滿向け貨車を部隊の引込線に引き入れ、積載されていた慰問品の上に部隊全員が乗り込み、南下した。沿線の在留日本人の罵声を尻目に……。列車は一路南下。だが、奉天郊外で上空に飛来したソ連軍戦闘機に停車を命ぜられた。間もなく戦闘機より降り立ってきたソ連軍の若き女性士官一人と兵数人に、部隊全員が下車をさせられ武装解除。わずかに対暴民用に騎兵銃携帯が許可された。

全員の身の回りの装具、炊飯具を持って満人部落平羅堡に移動。数日後、有刺鉄線の張りめぐらされた旧軍官学校に集結を命ぜられた。ここで部隊が再編され、貨車の到着を待つて次々と有蓋貨車に乗車。列車は南下せず、逆に北上した。「南鮮はアメリカ軍が駐留しているため、北回り、ハルビンよりウラジオオ經由で日本に帰国」とのソ連軍将校の言を信じ、「祖国に帰れる」「戦争が終わった」と喜びに胸躍らせ、飯盒

を叩き貨車に乗り込んだ。豊富な食料とアルコールに酔いしれていた。一方で、逃亡する戦友が目前で射殺されたり、将校と兵とが殴り合ったり、集団で徹底抗戦を叫ぶ小部隊もいた。逃亡した兵の穴埋めに、南下する日本人難民の群れから徴発されて貨車に乗せられた地方人もいた。貨車は広野を過ぎ、ソ連軍と八路军で溢れる街を通過して一路北上し、ハルビンを経て黒河に着いた。

九月中旬の北滿はもう寒かった。黒龍江の岸边で焚き火をしながら、この流れの先に祖国がある、そして間もなく故郷に帰れると、戦友同士語り明かした。黒龍江を渡ってよいよソ連の土。ソ連の大型貨車に乗車して夜陰に出発。だが機関車は南下せず、北上していった。夜明けに一人の戦友が叫んだ。「シベリアを北上しているぞ」。二日、三日、列車は走り続けた。やがて止まった。寒村の小駅で通訳から理由を説明された。「日本の本土はアメリカ及び連合軍の占領するところとなり、混乱が続いている。このため、治安が平穩になるまで、在満旧日本軍兵士はソ連で保護され

ることになった」と。

まだ「抑留」ということは考えられなかった。戦闘に参加した部隊は厳重な監視下に置かれ警戒も厳しかったが、非交戦部隊の我々は割合自由であった。貨車はシベリアの森林地帯から地平線の彼方まで大草原、行けども行けども次の原野を走る。イルクーツクを過ぎノボシビルスクより南下して二十数日後に、砂漠の中の街、ウズベク共和国の首都タシケント郊外に着いた。

#### 【執筆者の紹介】

軍隊経歴 関東軍の航空教育隊出身（一六六一三部隊）

満州公主嶺より奉天を経て入ソ、被抑留者となる。

ブラゴエシチェンスクイタシケント

昭和二十三年七月二十三日、舞鶴港上陸、復員。

（広島県 山田 浩造）

## シベリア抑留の思い出

愛媛県 武田 誠一

（旧姓 深井）

八月十七日の夕方、突然停戦ということになり、何がなんだか判らないまま十八日の朝が来た。全員集合して陣地から下り、蟻の行列の如くぞろぞろと歩き出した。まだ日本が連合国に無条件降伏をしていることなど知る由もなかった。勿論天皇陛下の終戦の放送も知らなかった。密江峠を越え下り始めた頃、先頭の部隊の者が両手を上げており、何をしているのかはじめは判らなかつたが、自分の番になってはじめてソ連軍との対等の停戦協定ではなく、日本は負けたのだという実感が湧き、残念でたまらなかつた。いわゆる武装解除である。

いよいよ捕虜となり、琿春飛行場付近の大豆畑に仮の収容所があり、ここに収容された。収容された人員